オクリ、ディケンズ、オースティン

――境界の手前、境界の奥――

栂　正行

ディケンズの痕跡

ベン・オクリ（一九五九―）がチャールズ・ディケンズやジェイン・オースティンの影響を受けたと指摘するのは、オクリの唯一の単行本の研究書の著者ロバート・フレイザーだが、フレイザーは、ディケンズ描くオリヴァーなど若き主人公とオクリの『飢えたる道』の少年アザロの類似点を指摘するにとどまり、さらなる比較や、ましてオースティンとの比較に立ち入ることはない。[1]

ここでは、オクリの作品に見られるディケンズ的と形容されうるものとオースティン的と形容されうるものを、主として、読者のなかで直感的に結びつくテキストに焦点をあわせて検討し、あわせてオクリの全作品の見取図を提示したい。

オクリの作品を年代順に通読すると、フレイザーの言葉が、単にすぐれた英語作家はおしなべてディケンズやオースティンに学んでいるという以上の意味をもつものであることに気づく。いたるところにディケンズやオースティンを連想させる記述がある。

たとえば、『飢えたる道』に始まるオクリの三部作の二作目『魅惑の歌』の冒頭に近い部分、アザロとボクサーの父親が、かれらの母にして妻を捜す場面はどうであろうか？

日ごろ物売りをしている母親の出入りしそうなラゴスのストリート、ロード、そしてマーケットの界隈を息子アザロと父をして歩かせる作家オクリの姿勢が、『リトル・ドリット』でタティコーラムをかくまうミス・ウェイドの住居を求めロンドンのパーク・レイン界隈をアーサー・クレナムとミーグル氏をして歩かせる作家ディケンズの姿勢とぴたりと重なることは一読明らかだ。[2] ひとつ異なるのは、少年アザロが精霊で、精霊の世界に戻れと呼びかける仲間の精霊たちの言葉を尻目に、この人間であるよき父と母のもとで生きていこうと決意すると

ころだ。そして現実の世界と精霊の世界のふたつの世界の間には、さまざまなからくりがある。

オクリ作品の見取図

ではジェイン・オースティンの痕跡はオクリの作品にどのようなかたちで残っているのであろうか？　これを確かめるには、オクリの作品を便宜上、リアリズム的な作品とマジックリアリズム的な作品とに分けておく必要がある。

ただし、厄介なことに、但し書きがいる。マジックリアリズムとはわたしたちがオクリのある種の作品の特徴を文学史的に整理する際のラベルに過ぎず、こうしたラベルは個々の作品の読みに入っていくや、たちどころにその限界を露にするという点だ。

下に掲げるのは、オクリの小説を、縦軸に出版年代を、横軸にその舞台をとり、並べたものだ。アルファベットで表示した作品名は末尾の年表に記した。原著は参考文献に掲げてある。現在、『飢えたる道』と『見えざる神々の島』のみ邦訳がある。

この表で確認しておきたいのは、それぞれの作品の舞台だ。左から四枠目までの小説に関して言えば、順次、現在のナイジェリア、現在のナイジェリア、ヨーロッパ、具体名のない「島」や「王国」となる。ふたつのナイジェリアは、リアリズムのナイジェリアと精霊の登場するマジックリアリズムのナイジェリアだ。

九十五年の作品『見えざる神々の島』の舞台はどこと特定されてい

リアリズム的	マジックリアリズム的	リアリズム的	マジックリアリズム的	詩　集	評　論
ナイジェリア	ナイジェリア	ロンドン、パリなどヨーロッパ	具体名のない「島」や「王国」		
			ＳＢ（07）		
		ＩＡ（01）			
				ＭＦ（99）	
	ＩＲ（98）				
					ＷＦ（97）
ＤＬ（96）					ＢＨ（96）
			ＡＧ（95）		
	ＳＥ（93）				
				ＡＥ（92）	
	ＦＲ（91）				
ＳＮＣ（88）					
ＩＳ（86）					
ＬＷ（81）					
ＦＳ（79）					

ない島に移る。読み進んでの印象はイタリアのどこかの町のようだ。白と黒の大理石という描写があるのでジェノヴァに連想が走る。イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』に出てきそうな場所にも見え、『到着の謎』のV・S・ナイポールに霊感を与えたキリコの描く埠頭のようにも見える。

二〇〇一年の『アルカディアにて』で舞台はロンドン、パリなどヨーロッパに移る。そして二〇〇七年の『スターブック』で舞台はまたしても見知らぬどこかの土地に設定される。

先に触れたディケンズ的と形容しうる箇所は九十三年発表の『魅惑の歌』からのものだ。しかし、ディケンズの痕跡はこれだけにとどまらない。舞台がナイジェリアのかつての首都ラゴス（たとえば『危険な愛』）であれ、パリの太陽宮であれ（『アルカディアにて』）、オクリの読者はいつどこででもディケンズ的記述に出会う。逆に言えば、その意味で、ディケンズ的という観念には時空の制約がないのかもしれない。マジックリアリズムという言葉とてない十九世紀当時からディケンズはすでに境界に足をかけていた。

さて、そうして改めて表を眺めてみると、オクリの作品が縦の枠で括られるばかりでなく、左下から右上へと推移する大きくふたつの作品群があることがわかる。

第一の作品群は、『花と影』、『内部の風景』、『神殿の出来事』、『新たなる戒厳令下の星空』というナイジェリアを主な舞台とするリアリズムの小説、『飢えたる道』、『魅惑の歌』というナイジェリアを舞台とするマジックリアリズムの小説、そして『見えざる神々の島』という不思議な島を舞台とする作品の三つから成り立っている。時代が下れば下るほど抽象の度合いを増し、具体的な土地から離れていく。その後オクリはこの推移を再びたどる。

第二の作品群だ。それは『危険な愛』に始まりアザロ三部作の第三作『無限の富』を経て、アルカディア探求の旅『アルカディアにて』を経て『スターブック』に至る。

オクリは具体から抽象への旅を二度繰り返す。オクリはナイジェリアという土地からしだいに離れてはまた戻り、ふたたびそこから静かに離れていく。

ジェイン・オースティンについてはどうであろうか？　もちろんすぐれた英語小説の書き手はディケンズにもオースティンにも学ぶというレベルでのオースティンに出会うことはオクリのどの作品の読解でも可能だ。しかし、さらにオースティン的と形容しうる揺ぎ無いテキストはないであろうか？

それには、オクリがリアリズム的ナイジェリアとマジックリアリズム的ナイジェリアの境界をいかに踏み越えていったかを見る必要がある。今、検討したいのは、短編集『神殿での出来事』の冒頭の短編「橋の下の笑い」だ。

モニカ

内戦が始まると人々が寄宿学校から消えた。教員も消えた。少年は二人の友人とともに親が迎えに来るのを待っている。野菜畑から食料

を調達し、寮で眠る。昼間は校門で親の到着を待つ。その間、「ぼくがいつも考えていたのはモニカのことだった」。

ぼくがおしっこをまっすぐにとばせるようになったころ、モニカはまだ小さな女の子だった。ぼくが自分のはだかのどこをかくしたらよいかわかりだしたころ、モニカの足は、すらりとのび、体は引き締まり、街を歩きまわり始めたその姿はきれいな野生の猫のようだった。[3]

そんなモニカが、ある日、川で少年たちと競って、おぼれそうになる。その川は少年よりも少女を好むと言われていた。川が少女の命を奪おうとした。モニカは泥だらけの姿で引き上げられた。

モニカの顔は青ざめていた。まるでモニカが自分の体から長い旅に出たかのようだった。[4]

このことがあってから、モニカはエガンガンと呼ばれる仮装者たちにまとわりつくようになった。エガンガンは骸骨を意味し、扮するのは男子。草の衣をまとい、木製のおそろしい仮面を被る。鼻はとがり、唇は薄い。仮面は動物の顔をかたどったものであることもある。エガンガンに扮したものは昼夜を問わず通りに出没し、踊り、グロテスクな動作をする。エガンガンは死者の国からもどったものとされ、生者の世界から厄介者を連れ去る。エガンガンに触れるものには死がおとずれるとされる。

モニカの関心は踊りそのものにあった。モニカがとても上手に踊ったので、コインを与えるものもいた。モニカは男子がエガンガンに扮するという約束事を破った。モニカにはエガンガンの持つ闇の領域が理解できなかった。少年は「トカゲに寮から追われるとき、戦闘機の轟音に森へと逃げ込むとき、モニカのかたちの整いはじめた胸を想像した」。

畑の中にかかしが姿を現す。かかしと見えたのは少年の母だった。それほどにやせていた。少年は友人ふたりを一緒に連れて行ってくれと母に懇願する。母は、「自分のために」この子たちまで兵隊に捕まったら、墓に入っても安らかに眠れないと、拒む。母はイボ人だった。母は残る二人にお金と食べ物を与え、少年を連れて帰路につく。バスはない。数時間後、トラックに乗り込む。荷台にスペースはない。

たしかに長い旅だった。道は終わりがないかに見えた。木々の葉やブッシュは埃まみれだった。検問所が百もあった。どの検問所の兵士たちも闘いの興奮のただなかにあった。すべての車を止め、隅から隅まで、あらゆる隙間にいたるまで、念入りに捜索し、すべてのかばんや袋を空にし、銃で背中をつつき、千もの質問を浴びせかけた。ぼくたちは森のなかを抜け、道端に転がるいくつもの死体を目にした。[5]

少年は、兵士たちに問い詰められ、とっさに母の言葉ではなく父の言

四

葉を発することで、命拾いをする。やがて母と少年は父の待つ家に帰る。少年は父にモニカの消息をたずねる。モニカは生きていた。モニカはときおりひとりで橋の下に出かける。少年もついていく。川のなかに何かが浮かんでいる。子供たちの死体だ。モニカもまた多くの友達を内戦で失った。兵士が橋を往来する。仮装したモニカが兵士をからかう。モニカも少年たちもすぐに戯れが過ぎたことに気づく。極度に緊張したモニカの腿を尿がつたう。モニカは兵士に連れ去られる。

「まるで（as though）モニカが自分の体から長い旅に出たかのようだった」。この一文にリアリズム的ナイジェリアとマジックリアリズム的ナイジェリアが混在している。「まるで」がはずれれば、作品世界はそのまま『飢えたる道』の精霊の世界となる。『飢えたる道』は「体から長い旅に出た」ものたちの世界だ。「橋の下の笑い」に代表されるリアリズム的ナイジェリアを舞台とする作品群の人物描写はオースティン的世界にとどまる。作中人物たちは「体から長い旅」に出ることはない。その後、オクリの作中人物たちは『飢えたる道』以下三部作で「体から長い旅」に出る。そして『アルカディアにて』で再び舞台は現実世界にもどる。

オースティンの読者がオクリにオースティンの影を見るのは、この現実世界を舞台とする作品群のなかでのことだ。つまり『花と影』、『内部の風景』、『神殿の出来事』、『新たなる戒厳令下の星空』という初期のリアリズム作品、『飢えたる道』と『魅惑の歌』を経たあとのリアリズム作品『危険な愛』、そして『無限の富』を経たあとの『アルカディアにて』ということになる。

『危険な愛』のオモヴォとイフィのたどり着く先を見極めたいという衝動、『アルカディアにて』のアルカディアよりも各作中人物たちの過去と未来を見極めたいという衝動は、そのままオースティンの読者のそれときれいに重なる。オクリが現実世界にもどるとき、そこにはかならずオースティン的人物描写がある。

註

（1）Robert Fraser, Ben Okri, Northcote House, 2002, p. 20.
（2）Charles Dickens, Little Dorrit, 1855-57.
（3）Ben Okri, Incidents at the Shrine, 1986, Vintage, 1993, p. 2.
（4）Ibid.
（5）Ben Okri, Incidents at the Shrine, 1986, Vintage, 1993, p. 4-5.

年表（ベン・オクリの半生、ナイジェリアの作家たち、ビアフラ戦争を中心に。作成にあたってはロバート・フレイザー『ベン・オクリ』などを参照した）

一九三八年　D・ファグンワ『亡霊の森の勇敢な狩人』
一九五三年　チェツオーラ『やし酒のみ』
一九五八年　ショインカ『沼地の住人』
　　アチェベ『崩れゆく絆』
一九五九年　三月十五日ベン・オクリ、ナイジェリア中央部ミンナに生まれる。父シルヴァーはナイジャー川ワリ近郊出身のウルホボ人、母フレイスは中西部出身のイボ人。
一九六〇年　ナイジェリア、イギリスから独立。
一九六一年　ベン・オクリの父シルヴァー渡英。のちに家族合流。
一九六二年　オキボ『天上の門』

一九六四年　九月ベン・オクリ、ロンドン、ウッズ・ロードのジョン・ダン小学校に入学。オカラ『声』
一九六五年　ベン・オクリ一家ナイジェリアに移る。ベン・オクリはワリ北部のチルドレンズ・ホーム・スクールに転校。ショインカ『道』、『通訳者たち』。
一九六六年　一月十五日バレワ連邦首相暗殺。アギー――イロンシ少将統一政府構想を出す。七月二十九日アギー――イロンシ少将暗殺。八月一日ゴウォン中佐新政権樹立、国家元首・全軍最高司令官に就任。ンワバ『エフル』。
一九六七年　一月ガーナでアブリ会議開催。五月三十日オジュクゥ中佐ビアフラ共和国の分離・独立を宣言。詩人クリストファー・オキボ、イバダンのケンブリッジ大学出版局代表を辞しビアフラ軍に入りヌスカの戦いで落命。ショインカ第三勢力結集に奔走し、連邦政府により拘束。イバダン、ラゴス、カドゥアで獄中生活。ベン・オクリ、イバダンのクライスツ・ハイスクールに通学。ショインカ『イダンレ山詩集』。
一九七〇年　一月十日オジュクゥ将軍コートジボワールに向け亡命。一月十二日ビアフラ共和国臨時国家元首代理エフィオング少将降伏宣言。
一九七一年　ベン・オクリ、ウルホボ・コレッジに寄宿。
一九七五年　オキボ『雷鳥の径』。ベン・オクリ、ヨルバ・コレッジ卒業。ロンドンに渡り、ラゴスを舞台とする『花と影』執筆開始。
一九七八年　ベン・オクリ、ロンドンに渡り、ニュー・クロスのおじの住居に寄宿。
一九七九年　エメチェッタ『母の喜び』。
一九八九年　ベン・オクリ（ＦＳ）『花と影』（アザロものとして再編）
一九八〇年　チンウェイズ『アフリカ文学の非植民地化へ』。
一九八一年　ショインカ『アケ』。
一九八二年　ベン・オクリ（ＬＷ）『内部の風景』（『危険な愛』として再編）
一九八六年　ベン・オクリ（ＩＳ）『神殿での出来事』（短編集）
一九八七年　アチェベ『サヴァンナの蟻塚』
一九八八年　ベン・オクリ（ＳＮＣ）『新たなる戒厳令下の星空』（短編集）
一九九一年　ベン・オクリ（ＦＲ）『飢えたる道』（邦訳『満たされぬ道』、精霊の少年アザロを主人公とする小説）
一九九二年　ベン・オクリ（ＡＥ）『アフリカン・エレジー』（詩集）
一九九三年　ベン・オクリ（ＳＥ）『魅惑の歌』（アザロを主人公とする小説）
一九九五年　ベン・オクリ（ＡＧ）『見えざる神々の島』（イタロ・カルヴィーノ風の不思議な島の話）
一九九六年　ベン・オクリ（ＨＢ）『天空の鳥』（評論集）
一九九六年　ベン・オクリ（ＤＬ）『危険な愛』（画家オモヴォを主人公とする小説）
一九九七年　ベン・オクリ（ＷＢ）『自由になる方法』（評論集）
一九九八年　ベン・オクリ（ＩＲ）『無限の富』（アザロを主人公とする小説）
一九九九年　ベン・オクリ（ＭＦ）『メンタル・ファイト』（詩集）
二〇〇一年　ベン・オクリ（ＩＡ）『アルカディアにて』（アルカディアを主題にドキュメンタリー映画を撮るグループの人々のアルカディア観）
二〇〇七年　ベン・オクリ（ＳＢ）『スターブック』（ある王子の物語）

参考文献

Okri, Ben, Incidents at the Shrine, 1986, Vintage, 1993.
――――, Stars of the Late Curfew, London, 1988.
――――, The Famished Road, London, 1991.
――――, African Elegy, London, 1992.
――――, Songs of Enchantment, London, 1993

———, Astonishing the Gods, London, 1995.
———, Dangerous Love, London, 1996.
———, Birds of Heaven, London, 1996.
———, A Way of Being Free, London, 1997.
———, Infinite Riches, London, 1998.
———, Mental Fight, London, 1999.
———, In Arcadia, London, 2001.
———, Starbook, London, 2007.
Dickens, Charles, Little Dorrit, 1855-57.
Fraser, Robert, Ben Okri, Northcote, 2002.
Ying, Zhu, Fiction and the Incompleteness of History: Toni Morrison, V. S. Naipaul, and Ben Okri, Peter lang, 2006.
北島義信「ベン・オクリとマジカル・リアリズム」第十三回ポストコロニアル文学研究会（二〇〇七年十一月二十四日、於中京大学）配布資料。
室井義雄『ビアフラ戦争』、山川出版社、二〇〇三年。